

辻真先

死劇『ラビリンス』



SONORAMA
NOVELS

SONORAMA NOVELS



しげき
死劇『ラビリンス』

一九九〇年十一月二〇日 初版発行

著 者 辻 真 先

発行人 広 橋 敏 栄

発行所 株式会社朝日ソノラマ

郵便番号 一〇四

東京都中央区銀座四一二一六

第二 朝 日 ビ ル

電話 (〇三) 五六三ー六〇二ー三

振替 東京二一四〇三一

印刷所 株式会社光邦

製本所 光和製本株式会社

(落丁本・乱丁本はおとりかえいたします)

© Masaki Tsuji 1990 Printed in Japan

ISBN4-257-01014-2

青春ミステリー

死劇『ラビリンズ』

辻江真先学院図書館

蔵書章



ソノラマノベルス

H71498

目次

第一章	水の迷宮	6
第二章	風の迷宮	50
第三章	土の迷宮	88
第四章	火の迷宮	126
あとがき		192

イラスト／畑農照雄

迷路の内部に棲^すまえる

死の恐怖なるミノタウロスに氣をつけよ。

怪物は人間をもりもりとむさぼり啖^くい

人びとの骨肉を切り裂く。

それゆえこの迷宮のなかをひそやかに這え

ゆめ怪物といさかいを起すなかれ。

「迷宮幻想」——ある迷宮物語より

種村季弘（日本ブリタニカ）刊

第一章 水の迷宮

1

濃霧が水面をおおっていた。

いまは昼のさなかか、あるいは暮れなずむころなのか。

たよりなげな薄明の光が瀾^{びまん}漫する下で、ちゃぶり……ちゃぶりと水が音をたてている。

川——ではあるまい。水の流れは、川とはあきらかに異質であった。池とも、沼とも、湖とも思われ

ぬ。

霧のかたに、なお広々と乳白色ににごった水のつづく気配は、やはり海だ。

だがここに横たわっている海は、あまりに生気がない。地球上で繁殖する、あらゆる生命の母体は海であるべきなのに、ものうげな惰性が、ちゃぶり……ちゃぶりと、やるせないリズムをきざんでいるだけだった。

おそらくこれは、入江なのだ。リアス式沈降海岸の特色は、複雑きわまりない海岸線にある。ひょうたんのようにくびれこんだ内海の奥は、どれほど外洋が荒れても、隔絶された静けさをたもつ。

その上、濃密な海霧^{ガス}が、入江を常人の世界から切り離していた。

わずかな波の音をのぞいては、海は太古の静寂を永遠に守りつづけるかと思われた。

だが耳をすませば、平和を破るモーターボートの爆音が、次第に近づいてきたことがわかるだろう。

規則正しかった波形が崩れた。

霧を突き抜けて、一艘の真紅にぬられたボートが出現した。モーターボートというより、クルーザーと呼んだ方が似合う、大型船だった。

彼女の接近に符節を合わせるように、風が起きた。波頭が白く反転し、霧は呆気なく吹き飛ばされた。船には、船員をのぞくと、五人の若者が乗っていた。正確な年齢はわからない。だが、三人いる娘たちの唇は、必ずしもルージュに慣れていないようだ。大学生ではあるまい。高校二年……せいぜい三年というところか。

クルーザーに色を合わせたような、スカレットのTシャツに、短パンから惜しげもなく形のいい足をさらした少女が、キャビンから体を突き出して叫

んだ。

「明かりが見える」

「そう乗り出すな、ユリー」

年齢のわりにドスのきいた声で、少女をたしなめたのは、柔道でもやっているのか、がっしりした体格の少年だった。

「海へ落ちて、知らないぞ。泳げないのは、お前だけじゃないか」

ユリーと呼ばれた少女は、鼻の頭にしわを寄せて笑った。

「だからあ、ほかのみんなでえ、寄ってたかって助けてくれるんでしょ」

「アホか」

船室の一番奥に座っていた、肉づきのいい娘が笑った。

「ユリエが沈んだら、みんなで寄ってたかって足を

引っ張るわよ」

「どして」

「テセウスの役をやりたいのは、女にも男にもいっぱいいるってこと」

「残念ね！」

威勢よく少女がいい返す。

「邦子のテセウスってメはないわよ。そんなグラマ—な男役では、ミノタウロスがたまげちゃう。ねえ、友行」

いまし方ドスのきいた声で彼女をたしなめた男が、顔をしかめた。

「なれなれしく呼ぶなよ。俺には松川って苗字があるんだ」

「なにさ。自分ではユリーなんて気安くいうくせに」

「ユリーは名前じゃないわ。あんたの綽名^{あだな}だからい

いじゃないの」

理屈っぽく邦子からむ。

それまでだまっていたもうひとりの少女が、血の気のない顔をあげて訊いた。

「なんの明かりかしら……」

船首がめざす方向は、人工の明かりが点っている。風が当たっていると見え、こまかく左右にゆれていた。

「棧橋^{さんばし}だろうな」

ひびきのいいバリトンが答えた。声の主は、これも黙々と窓の外に視線を投げていた、べつの少年だ。

「じゃあ、もう着くのね！」

「船はとうに、入江にはいつている。到着は時間の問題だよ」

「よかった……」

青い顔だった少女は、心からホッとしたようだ。

小柄で、顔も小さく、子供っぽいから、どうかすると中学生ぐらいに見える。

「船に弱いんだな、河内」

「ええ……」

やせ我慢して笑おうとしたとたん、ボートが横波を食って大きく揺れた。反射的に口をおおう河内を見て、邦子が悲鳴をあげた。

「もどしちや、いやよお」

「吐いたら、中味を口へ突っ込んでやるからな」

松川友行が吠え^ほえると、ユリエがきやあきやあ笑った。

「汚いなあ。ミノタウロスの役をやるだけあるわ」

「もう少しの辛抱だよ、河内。ほら、減速した」

と、友行に比べれば、もうひとりの少年ははるかに親切だ。性格だけではなく、体格も対照的だった。

横幅の広い友行に対して、こちらは長身だ。スマ

ートといえは聞こえはいいが、少々華奢^{きやしゃ}に見えないでもない。

その少年に、友行が呼びかけた。

「田口よ。栈橋に立ってるのは、だれだ」

「栈橋に？」

船首に背を向けていた田口少年が、体をねじった。無骨なコンクリート造りの栈橋が、ガスの中からあらわれてきた……できた当座は、さぞ堂々としていたのだろうが、時間の経過が亀裂^{きれつ}をくわえて、先端三分の一が十度ばかり傾いている。

突端に立てられた柱から、例の明かりがぶら下がって、海風にひっきりなしに揺れていた。

その明かりの真下に、ひとりの少女が立っているのが見えた。濃紺のワンピースに、フリルのついた白いエプロン。頭にも、それと対^{たい}になった白いキャップを載せているので、友行がいった。

「まるで、メイドみたいだな」

「そうだよ」

と、田口が答えた。

「あの人が、われわれの世話をしてくれる、メイドさんだ」

「へえ！」

邦子が目をかがやかせた。

「メイドに仕えられるなんて、私はじめてだわ」

「私だってそうよ」

ユリエも、窓におでこを当てていった。

「ようし、こき使ったる」

「そんな、かわいそうよ……私たちとおなじくらいの年じゃない」

そういったのは、船酔いからようやく立ち直りかけた、河内という少女である。

ボートはまったくエンジンを切り、ただ慣性で、

ゆるゆると棧橋に近づいてゆく。

「あら！」

気早にキャビンのドアをあけたユリエが、おどろきの声をあげた。

「あの人、目が見えないの！」

いかにも、近づくボートに向けられた少女の両眼は、糸のように閉ざされていた。

「しっ。聞こえるわよ」

邦子が止めたが、陽気なユリエの声は、とうの昔にメイド姿の少女の耳にとどいたようだ。

ボートから投げられたロープを、微動もせず宙で受け止めた彼女は、澄んだ、張りのある声で、一同に呼びかけた。

「みなさまのお世話をさせていただきます、白木寿々子（しらき すすこ）でございます。ようこそ、迷宮島へいらっしゃいました！」

2

詩劇『ラビリンズ』 配役

ミノタウロス 松川友行

テセウス 夏 ユリエ

アリアドネ 河内 沙也子

ミノス王 田口 研一

妃パシパエ 小島 邦子

夕食の席で、若い客たちから、秋の学園文化祭に上演する予定の『ラビリンズ』の配役を聞かされた若いメイドは、小首をかしげて質問した。

「ダイダロスは出ませんの」

「わあ」

彼女の問いに、即座に反応したのは、夏ユリエで

ある。

「よく知ってるう」

「きみが知らなさすぎるのさ」

田口研一に笑われ、彼女はまた、鼻の頭にしわを寄せた。これがユリーことユリエのくせのようだ。

ダイダロス——いうまでもなく、神話時代最高の技術者であり、伝説の迷宮を、クレタ島に建設した名匠である。

クレタ島の王ミノスは、海神ポセイドンとの約定を破り、彼に捧げるはずだった牡牛をすり替えてしまった。怒ったポセイドンは、王妃パシパエがこともあろうに、牡牛を恋い慕うように仕向けた。こうして生まれたのが、牛頭人身の怪物ミノタウロスである。

驚愕したミノス王は、ダイダロスに命じて迷宮ラビリントスを造営させ、その中心に怪物を閉じこ

めた。

ラピリントスというギリシャ語は、もともと両刃の斧おのの意味であり、現物が、クノッソス宮殿の遺跡から出土している。当時は宮殿のシンボルとして、いたるところに装飾品として用いられたらしい。

さてミノス王は、恨みのあるアテネを攻略し、九年に一度、七人ずつの少年少女を貢みつぎ物とするよう強要した。迷宮に棲むミノタウロスの餌食えじきとするためだ。

三回目の犠牲者の中に、自ら志願してクレタ島におもむいた、テセウスと名乗る美少年がいた。その正体は、アテネ王の後継者であり、ミノタウロス退治のため、ひそかに迷宮へむかおうとしたのだ。

ミノスの王女アリアドネは、テセウスに恋し、彼の手助けを決意する。

ラピリントスをぬけ出す手段——糸玉の端を迷宮

の入口にむすびつけ、進入するにしたがい糸巻きの糸をほどこいてゆくのだ。ミノタウロスを退治したあとは、その糸をたどって外界へ還かえればよい。

アリアドネの言葉にしたがつて、テセウスは怪物を倒し、無事迷宮の外へ出た。アテネから同行した少年少女に、アリアドネをくわえたテセウスは、一路故国にむかつて船出する——

大要このような物語を、詩劇として書き上げたのが、清新高校の演劇部顧問であり、国語教師の三沢数彦だった。

清新高校は、いわゆる名門校ではないが、戦前すでに建学された清新女子大の下に、中学・高校とあって、こちらは男女共学だ。女子高生は大学へエスカレーター入学できるが、男性が進学しようとする、世間なみの受験地獄をくぐらねばならない。

したがって演劇部員も、男はきわめて少ない。卒

業後すぐ家業の新聞販売店を継ぐ松川友行と、進学したくても学資がままならない田口研一のふたりをのぞくと、他の部員はすべて女性だった。

本来なら迷宮に不可欠のタイタロスが登場せず、少年であるべきテセウスに夏ユリエがあてられたのも、理由は簡単だ——男がいないから！

三沢は、教師としてはあまり熱心な部類ではないが、演劇部の顧問役には嵌^はまっていた。

かたよった部員の男女比に合わせて劇を書き上げ、しかも舞台となる迷宮の、願ってもない雛形^{ひながた}を、部員たちの研修のために、紹介してくれた。

それがこの、迷宮島であった。

もちろん、迷宮島というのは正しい呼称ではない。西伊豆の杉崎町に属する、周囲五キロばかりの小島で、遠望すると亀の甲羅^{こうら}のように中央がゆるやかに盛り上がっていることから、亀島の名がついている。

杉崎漁港からモーターボートを走らせて、およそ二十分程度の距離だ。

島全体が、実は三沢先生の所有権下にある。亡くなった先生の父親三沢数馬は、昭和十年代すでに有名な医学者で、戦局の先を見通し、疎開^{そかい}するために島を丸ごと買った——という。

もつとも先生にいわせると、父の三沢博士はかなり偏屈^{へんくつ}な人物だったらしい。さいわい戦時中あちこちに買っておいた土地が値上がりしたので、生活の心配は皆無だった。むしろ、金がダブついて困るほどで、博士はその捌け口^はとして、奇妙な道楽をはじめた。

住んでいる島を改造して、樹木を植え、花壇をつくり、巨大な庭園そのものを迷宮に構成してしまったのだ。

日本ではめったに見られないが、ヨーロッパでは

十六世紀以降、この種の庭園迷路が急速に増加している。いくつかは現存していて、その中で最古のもの、一六九〇年、ロンドン郊外に造成された、ハンプトン・コート・パレスの迷路である。

ステイブン・キング原作、スタンリー・キューブリック監督の映画『シャイニング』を見た人なら、狂人ジャック・ニコルソンが、雪の庭園迷路から脱出できず、ついに凍死するシーンを思い出されるだろう。

父親が死ぬと、三沢数彦は島を年老いた管理人夫妻にあずけて、妻を伴って上京した。

子供に恵まれず、夫人も十年後に病死したので、それ以来三沢はひとり暮らしである。

ただしこの間に、彼は孤児だった白木寿々子、養女にするつもりで引き取っている。彼女が五歳になったばかりのころだ。

ところがその数年後に三沢夫人が亡くなり、寿々子自身も事故で視力を失ったため、三沢は入籍を見合わせている。といって、それまでの経緯もあり、まったく見放すというのも人情において忍びないので、義務教育の中学を卒業した時点で、彼女を島へ送りつけた。

管理人の塙^{はなむら}夫妻が、小遣い稼ぎに民宿をはじめたというので、その手伝いをさせるつもりだったのだ。

寿々子は利発な少女であつたし、視力を失ったといつても、せまい島の中であつてみれば、慣れるにしたがいおどろくほど役立つようになってきた。

三沢も、養女となるはずだった寿々子に情が移つたのか、アメリカにまで連れて行つて、かの地の名医に手術の執刀を仰いだのだが、けっきょくはかばかしい回復は見られなかったという。

……こんなところが、田口が三沢先生から聞いてきた、迷宮島の情報だった。

三沢にとって、島は故郷なのだから、生徒たちといっしょに帰るつもりでいたところ、折悪しく悪性の風邪をひきこんで、同行が不可能になった。先生に代わって、みんなを連れていく役割を担った田口としては、島についての一切を、耳に入れておこうとしたに違いない。

ここで迷宮島のおよその状況を、説明しておこう。棧橋が設けられているのは、島の東端である。

亀島の名の通り、東西に長い楕円形で、最高所はおよそ二十メートル。ただし海蝕をうけやすい地質のため、島の周囲にはフィヨルドにも似た深い入江がいくつも食いこんでいるので、上空から見ると、亀というより偽足類に似ている。

東南から南にかけて、高さ五メートル内外の崖が

めぐっており、その縁に近く木造二階建ての古ぼけた洋館が建っている。

古くはあるが、ほぼ半世紀の間、潮風に耐えて微動だもしなかったのだから、頑強無比といつていい。なんでも戦後に三沢博士が庭園迷路をつくらせた折莫大な費用をかけて補修工事をほどこしたそうだ。現在、二階に六畳から十畳大の洋間が五室あり、民宿として提供されている。

宣伝は一切せず、集客は口こみにたよるほかに、迷宮島の噂を聞いて訪問する客が意外に多いそうだ。

島の西部一帯はリアス式海岸が目立ち、かつ外海に面しているため峻峻で、めったに人の行ける場所ではないが、北にはせまいながらも砂浜があつて、夏に訪れる客たちをよろこばせている。

迷宮島の目玉である庭園迷路は、島の東北隅に位